

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520111

研究課題名（和文） ジョルジュ・ド・トレッサンにみる 20 世紀初頭の日本美術研究の諸相

研究課題名（英文） Goerges de Tressan and the embryo studies of the Japanese art in earl 20th century

研究代表者 南 明日香 (MINAMI ASUKA)

相模女子大学 学芸学部 教授

研究者番号：20329212

研究成果の概要（和文）：遺品の発見により、ジョルジュ・ド・トレッサン（1877-1914）の日本美術・工芸研究者としての履歴と活動、研究の方法とその成果の発表の過程が明らかになった。ことに、欧米で評価の低かったやまと絵の研究に関して、日本での最新の研究動向を踏まえつつ紹介した、その方法が解明できた。また、その研究の情報源である文献や交流関係を通して、第一次世界大戦前の西欧での日本美術・工芸研究の様相が部分的に把握できた。

研究成果の概要（英文）：A study of Georges Tressan's life (1877-1914), work and research methods as an historian of Japanese art can be undertaken on the basis of the recent discovery of his papers and art objects. We now understand, for example, that he attached importance to Yamato-e, a genre which was ignored in the West, following recent criticism written by several Japanese specialists. In addition, an analysis of his work resources such as documents and a network of informants, allows us to visualize more clearly the milieu of European japanologists and historians of Japanese art in the period just before WWI.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：哲学 ・ 美学・美術史

キーワード：トレッサン、美術批評、ジャポニスム、日本美術、フランス、鐔

1. 研究開始当初の背景

ジョルジュ・ド・トレッサンは、近年のジャポニスム研究において名前や著書は知られていながら、その経歴や活動について不明であった。南がその執筆活動について 2008 年から 09 年にかけて調査し、第一次世界大戦前のフランスでの日本古美術・工芸研究で先駆的な役割を果たしていたことがわかった。またこの時期のフランスでの日本美術に対する関心について、日本趣味を超えた研究

的萌芽が見られるという指摘があったが、具体的な検証はほとんどなされていなかった。

2. 研究の目的

トレッサンの経歴と業績、及び論文等の情報の源泉を調査し、その内容と水準を明らかにする。さらに彼が日本の古美術・工芸研究のために参考にしていた書物や論文から、20 世紀初頭の欧米と日本でのこの分野での研

究の状況とその研究の方法を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 遺族や関係者、関係諸機関を調査して連絡を取り、資料の有無やその閲覧調査の可能性を照会する。遺族に関してはトレッサンの妻の弟について単行書があり、その中にトレッサについて情報が含まれていたため、その著者に連絡をとってもらおうよう2009年5月に出版社に依頼の手紙を書く。
- (2) 遺品から、研究に用いた資料、カード、ノート、写真等を整理。また研究者からの書簡、名刺の整理とその履歴の調査。
- (3) 上記の書簡、名刺の差出人のその所属機関、著書などを調査。手紙の筆跡の解読とその内容の同時代的調査（すべての固有名詞に注釈がつけられることを目標）。
- (4) トレッサンが参考にした日本と中国関係の文献の原点を調査・分析。パリの装飾美術館図書室、ギメ美術館図書室、東京大学の総合図書館と東洋文化研究所などに所蔵があったので、それらの文献から内容と図版の使用の点でトレッサンの理解を見極めた上で、同時代の日本と西洋それぞれの論点の整理、及びトレッサンの独自性を見極める。
- (5) トレッサンの成果を相対化しつつ同時代の中での位置を見極めるべく、国内外の東アジア美術を所蔵していた美術館などでなるべく多数の所蔵美術品を実見し、蒐集者について知りコレクションの内容を知る。すでにコレクターやコレクション、極東の美術史について論文等がある場合はそれを入手して読む。

4. 研究成果

成果は3つに分けることが出来る。(1)トレッサンの経歴について、(2)その著作について、(3)関係する日本と中国の古美術・工芸研究について。以下それぞれについての成果と、「5. 主な発表論文等」での番号を記す。

(1) トレッサンの経歴についての調査

- ① 南はすでに2008年に調査結果を論文にしているが、その後2009年夏に妻の弟であった画家 Octave Morillot について著書のある Norbert Murie 氏と、出版社の ACR édition を通じて連絡がとれ、氏からトレッサンの遺族を紹介していただく。その結果孫の一人 Gilles de Ripert d' Alauzier がのもとで膨大なノート、カード、書簡、写真など基礎資料が発見された。全く未整理であり第二次世界大戦時以来の放置により損傷がひどかったが、その分類を行い撮影や複写を行った。2010年にはトレッサンの三女 Isabelle Vasseur 氏と孫の Béatrice de Tressan 氏に、2011年にはひ孫 Nathalie

Monoyeur 氏にお目にかかり、それぞれ資料を閲覧。なお、こうした一次資料は3年度間を通じて五月雨式にそれぞれの遺族の元から出ているために、休暇を利用して年度に二度ずつ渡仏し、その都度行った。

- ② トレッサンの履歴について、遺族からの聞き取りと陸軍将校であったためにフランスの陸軍のアーカイブ Archives militaires de Vincennes で調査。両親、出生、学歴、職歴（階位）等がわかるが、第一次世界大戦前のフランス陸軍の教育制度や機構が不明なためにその調査も行う。2011年には長男 Michel についても陸軍アーカイブで調査。また日本政府から旭日章を授与されている件について、日本の外務省公文書館で確認を取る。5-②に成果を発表。ただし授与の理由となった留学中の梨本宮との交流関係については、長女と三女からの情報以外未だに不明。
- ③ 名刺・書簡の文字の読み取りと、その差出人の身分・業績の調査と内容の分析。トレッサンが蒐集していた罈などのコレクターのうちフランスの Henri Vever、ドイツの Alexander Moslé や Oskar Münsterberg、ロンドン在住の Henry L. Joly、美術館関係でパリの装飾美術館の Raymond Koechlin、ギメ美術館の Emile Guimet・Léon de Milloué・Joseph Hackin や、ベルリンの東洋美術館 William Cohn、ハンブルクの美術工芸博物館 Justus Brinkman らとの交流関係、著名な出版社 Mercure de France からいきなり2巻本を出せた背景、日本の刀剣会との関係や鑑定の実態（秋山久作と交流）などがわかった。ことに Joly からの手紙は膨大な量で、二人は日仏協会機関誌などで論争もしており、その背後での論争の経緯や仏英独のコレクターの様子などが見えてきた。成果は5-③と⑤に成果を発表。
- ④ トレッサンの著作や書簡については、パリのギメ美術館図書室・装飾美術館図書室・INHA 図書・サント・ジュヌヴィエーヴ図書館、日仏協会機関誌、ベルリン『東アジア雑誌 Ostasiatische Zeitschrift』を通して新たに見つけることが出来た。複写の上、著作目録として5-②に成果を発表。
- ⑤ トレッサンの使用資料について。本研究の目的の一つは、第一次世界大戦前にフランスでいかに日本の古美術や工芸品について研究をしたのか、その現場を具体的に知ることにある。トレッサンの遺品からコピー代わりの写真のガラス板原板、浮世絵師関係のカード（約1000点）、資料ノート、執筆者から送られた論文の抜き刷りや著書等が多数見つかった。またトレッサンが書いた手紙や論文の参考文献欄から、執筆のために用いていた参考文献とトレッサンが所蔵していない場合はそれを閲覧していた

先（装飾美術館図書室等）などが明らかになった。論文中の図版で、日本の出版物からの転載分についてはその出典をつきとめる。成果は論文5-③と⑤、学会発表①に成果を発表

⑥ これまで推定であった、トレッサンの日本語の習得やくずし字、印などの読みとりについて巴里日仏協会図書室に勤務していた画家の山下新太郎と、フランスの日本語教育の先駆者である Léon de Rosny からの書簡でその実態がかなり明らかになった。山下書簡については、ブリジストン美術館の紹介で遺族に許可を得た上で5-②と学会発表①で紹介。

⑦ トレッサンが義弟の画家のオクターヴ・モリオのために論文を書いていることや、モリオから両親やトレッサンなどにあてた手紙を複製して、Jacques Doucet を通じて INHA 図書館に収めていたことがわかった。その全貌とトレッサンのドゥーセ宛書簡を閲覧し、複製する。トレッサンは、コレクションのために援助をモリオ家から支援を受けていたようだったが、その様子が間接的ながら明らかになる。

(2) トレッサンの著作について

① 二巻本の『Notes sur l'art japonais 日本美術論』について。そもそも陸軍将校であったトレッサンが日本美術にひかれた結果となった1900年の巴里万国博覧会の展示、その執筆の資料ともなった日本の農商務省刊行の日本美術史である Histoire de l'art du Japon、コレクターの Pierre Barboutau と美術雑誌編集長 Louis Gonse、ルーブル美術館東洋部門の Gaston Migeon それぞれの日本の古美術についての著作や紹介文、Léon Metchnikoff や Lafcadio Hearn の日本の歴史や習俗についての著作などを分析。それらと比較の上で、トレッサンの執筆と出版の経緯を、メルキュール・ド・フランス社の編集長の Alfred Valette からの書簡などからたどる。成果は5-⑤に発表。

② やまと絵（絵巻物、扇面を含む）について。トレッサン論文（『日本美術論』と論文三本）を中心に、その執筆の動機の解明のために Ernest Fenollosa のフランスにおける16世紀以前の絵画への無知への批判と William Anderson の西洋の美術のカノンに照らしての日本絵画批判の再検討。参考資料となった美術雑誌の『國華』とその英語版で内容を外国人向けに改めている The Kokka と、『眞美大観』での日本語と英語の解説などを調査。トレッサンがどの作品の図版を見て理解し、またどのような情報を得ながら独自の考察（画派ごとの特色の整理、西洋とは異なる遠近法と明暗法、集団

の人物・動物表現のユニークさ、支持体の多様性を強調）を打ち出しているかを分析。さらに同時代のフランスでの認識や日本での評価の状況と比較する。成果は5-④に発表。

③ 室町時代の水墨画を中心とした絵画について。日本の画家とその影響源となった中国の唐から北宋と南宋の画家の作品及び画論について調査。トレッサンと同時代の中国の固有名詞の表記が現代の表記とは異なっているために、その解読が必要であり、その上でそれぞれの画家と作品と、中国で出ている多数の画論について調査。さらに中国美術についての明治時代後半の日本での研究と、フランスでの受容と研究の両方を押さえなければならなかった。雪舟と狩野元信に関しては、それぞれの日本での研究史も調査。作品の実見のために台湾の故宫博物院見学をし、また2011年に関西中国書画コレクションに関する展覧会が京都国立博物館など京阪神の9館で開催されたので、それらを見学し関連講演会などを聴講。成果は東京国立文化財研究所（学会発表②）で発表（その後内容を整理して論文にまとめ、2012年12月刊のジャポニスム学会会報『ジャポニスム研究』に採用され発表）。

④ 鐔研究について。遺族の元でコレクションをカード化したものが見つかった。そこで雑誌に図版として掲載した分との対照を行う。さらに1932年のコレクションの売却の際に鑑定をした André Portier の孫が売却状況の資料を保存しているので、パリの Cabinet Portier で調査する。トレッサンの鐔の絵画的文様についての論文をめぐり、その内容を分析し物語や伝説と照合した結果を論文にする（5-①）。

⑤ 浮世絵研究について。Édouard Clavery が1930年代に改めてトレッサンの浮世絵研究の評価をしたこと、Bulletin de l'Association amicale franco-chinoise での指摘を契機に論争が起こったことなどを突き止める。鑑定の難しさの大きな原因でもあった浮世絵師の名前の変化について、トレッサンが日本で出ている『古画備考』を初めとする多数の文献をもとに、まとめ直して辞書化しようとしていたその経緯について調査。成果の一部は5-②と2012年9月にレンヌ第二大学で開催されるシンポジウム「Territoire de Japonisme」で発表予定（28日）。

⑥ トレッサンの発表したものに関する同時代評を L'Art et les artistes, Gazette des Beaux-Arts, Ostasiatische Zeitschrift, Bulletin de la société franco-japonaise de Paris, 『刀剣会誌』、『國華』等によって集める。

(3) 関係する日本と中国の古美術・工芸研究について

① 鐔のコレクションの入手先や美術商の F. Ebstein-Langweil 等について調査。また Alain Briolt 氏や Maxium Dujardin 氏といった現代のフランスのコレクターのトレッサン評価、及びその関係論文で鐔研究の方法論を学ぶ。トレッサンの鐔コレクションの導き手でもあった Edouard Mène について調査。2011 年 1 月に京都の清水三年坂美術館で透かし鐔についてレクチャーしていただく。

② フランスでの東洋研究について。トレッサンと交流があり法隆寺の仏教美術についての著作があってトレッサンが参考していた Claude Maître や彼が所属していた EFE0 (フランス極東研究所)、中央アジアの莫高窟の調査隊を率いた Édouard Chavannes などを調査。なお茨城大学の藤原貞朗氏がこの分野の専門家であり、学会を同じくすることから同じ機会に発表し、情報交換をする (学会発表①)。

③ ギメ国立東洋美術館、フリーア美術館、大英博物館、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、ニースのアジア美術館、パリのセルニュッシュ美術館・カモンド美術館、ボルドー市立美術館、リヨン市立美術館、台湾故宮博物院、東京・京都・奈良の国立博物館、根津美術館、静嘉堂文庫美術館、泉屋博古館等で東洋美術のコレクションを見る。仏教彫刻の他に圧倒的に浮世絵と桃山期の障壁画、武具、工芸品 (蒔絵類・印籠・根付け・鐔・面)、中国であれば水墨画と青銅器が中心であり、そのなかでトレッサンのコレクションのこだわりや、目立たないが重要だった美術品の評価などの意義がわかった。またギメ国立東洋美術館については東京国立文化財研究所による目録があり、これで同館に移された日本の絵画の現在での評価を確認した。

④ トレッサンと交流のあったコレクターで日本と中国の美術研究家オスカー・ミュンスターベルクの旧蔵書を、文庫に位置づけて東北帝国大学図書館が所蔵していることがわかった。そこで調査を東北大学で 2011 年 6 月、2012 年 1 月と 3 月に行った。学術資料研究公開センターのご協力で書庫内での調査の他に非公開の文書なども閲覧でき、1924 年にベルリンでミュンスターベルクの東洋美術関係の蔵書の売却があり、留学中の東北帝国大学関係者が購入し、その後の京城帝国大学などへの転売も含めて入手されたこと、もともと従来知られていなかった日本と中国の美術の研究書などを含む 2000 点ほどあったことがわかった。書庫に混排されているが蔵書票で確認でき、その結果トレッサン同様交流のあったコレク

ターや研究者の書簡や雑誌・著書の献本、新聞の切り抜きなどのファイルから研究の現場がわかることが判明した。さらに東北帝国大学関係者を確定するために、神奈川近代文学館の特別資料課に依頼して木下柰太郎文庫などで調査。木下や親友の児島喜久雄など岡倉天心の流れをくむ汎アジア的視野で日本美術をとらえ、欧米での東洋美術研究に関心の深かった日本人研究者とのクロッシングが見えてきた。

⑤ 日清・日露戦争後の黄禍論への対抗からも、日本では古美術・工芸の歴史と質の高さと独自性を対外的にアピールしようとしていた。そうした海外向けの美術出版における、古美術研究の言説と図版の確認と印刷史の調査。世界的に高水準を誇ったことや海外でも活かされていた事実がわかる。図版は西欧の多くの美術書にも転載され、トレッサンも用いていた。審美書院の美術全集シリーズと『國華』の外国人向けに編集し直された The Kokka の瀧精一主幹の日本と中国の書画に関する文章を徹底的に読んで、違いを明らかにする。東京大学総合図書館、パリの装飾美術館図書室に所蔵があり、改めて日本側の意図や、写真によるトリミングやイメージによる受容の影響を確認する。成果は 5-④と 2012 年 12 月刊『ジャポニスム研究』に発表。

以上、パリ万国博覧会開催と巴里日仏協会や EFE0 の設立のあった 1900 年から、第一次世界大戦前までの間、視覚資料に乏しいながら、日本とフランスやドイツ、イギリスでの美術雑誌メディアの発達によりそれを補い、その後の両大戦間や第二次世界大戦直後よりもむしろ広がりのある視野での日本古美術と工芸へのアプローチがあったことがわかった。また 20 世紀初頭においても、フランスでは華やかな装飾的な絵画が好まれたという従来の説の訂正が出来た。コレクターが研究家もかねていて、国境を越えて情報交換をしながら互いに刺激し合い論文や著書を発表していたこと、トレッサンがその中核にいたことがわかった。トレッサンについてはその履歴と仕事の全貌、西欧におけるそれまでの日本仏教美術・やまと絵や水墨画への偏見を払拭し、画論や宗教史にまで踏み込んで制作者の精神性に言及し評価を高めたこと。さらに浮世絵と鐔の新たな鑑定基準を打ち立てようとして花押や署名の解明と整理、文様の解明を試みていたことが明らかに出来た。鐔の鑑定は、フランスでは日本人美術商の林忠正の売り立て基準を再検討する動きが出ていたことがトレッサン宛の書簡からわかり、日本でも 20 世紀になって秋山久作が始めたのが、そうした鑑定の初期にトレッサンのような外国人蒐集家の関心が影響してい

たことも書簡を通して見えてきた。またミュンスターベルク文庫を通じて、第一次世界大戦での混乱後、トレッサンのように美術館・美術メディア関係者でないがために忘却されていった研究家たちの存在の重要性和、彼らの同時代の日本人美術研究者と重なる美術史観が明らかになってきた。

(3)連携研究者
なし

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

以下、すべて研究代表者による単著

- ①南明日香「ジョルジュ・ド・トレッサンの鐺研究における文様と物語絵」『相模国文 39号』2012年3月.
- ②南明日香« Un précurseur de l' histoire de l' art japonais en France : Georges de Tressan (1877-1914) », Arts Asiatiques vol. 65-2010, 2011年4月 p. 115-128.
- ③南明日香「トレッサン書簡にみる 20世紀初頭の日本美術研究ネットワーク 鐺を中心に」、『相模女子大学紀要』 vol. 74A, 2011年3月 p. 15-27.
- ④南明日香「ジョルジュ・ド・トレッサンの日本絵画史：やまと絵評価をめぐる」、『ジャポニスム研究』n° 30, 2010年12月 p. 14-27.
- ⑤南明日香「ジョルジュ・ド・トレッサン著『日本美術論』の刊行まで」、『相模女子大学紀要』 vol. 73A, 2010年3月 p. 1-16.

[学会発表] (計2件)

- ①南明日香「ジョルジュ・ド・トレッサン (1877-1914)にみる20世紀初頭の日本美術研究の諸相」、ジャポニスム学会第3回例会、2011年7月9日、お茶の水女子大学 大学本館.
- ②南明日香「ジョルジュ・ド・トレッサン (1877-1914) の室町期絵画評価」、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化財研究所会議室、2011年6月29日.

[図書] (計0件)

[産業財産権] (計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

南 明日香 (MINAMI ASUKA)
相模女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：20329212

(2)研究分担者

なし